

富士山・大根・2児の父(FD2)。

わたなべ 渡辺ふじお

新
富士雄



渡辺ふじお物語 完結編

「立候補の話を断って、では、自分は、何のためにこれまで生きてきたのか? そして、これから何のために生きていくのか?」と自分に問いかけてみると、意外に明白なものが浮かばない。政治の道に進めば、今の仕事、会社での立場を捨てることになる。懸命に働き、課長昇進を果たした会社と永久に別れることになる。もちろん、家計への影響もゼロではない。

貧しさの労苦をものともせずいつもやさしかった父と母、幼い体で病魔と戦う息子、その息子を見守ってくれる友人や青雲の志を抱いて青春時代を過ごした友たち、一人ひとりの顔を思い浮かべては悩んだ。進むべき道は本当にこれなのかという確信はまだ持てなかった。ふじおは妻の敦子に言った。「やはり、今の生活を捨てて人生を賭ける勇気は出てこない。断るしかないと思う」と。



第6章 「新たな決意」

「断るしかないと思う」と決断したふじおだったが、どこか割りきれないもの胸の底にわだかまっていた。見方によっては、人生の大きな転機と言えないことはない。ふじおは、友人に電話した。

「何があったんだ?」と、すっ飛んで来た彼は、にっこり笑って「すごいじゃないか。男冥利に尽きる話だ」「サラリーマンも大切な人生だが、人のために尽くす人生も大いにやりがいがある」と、励ました。その瞬間まで、断ることしか考えていな

かったふじおは、急にそんな自分の気持ちに恥ずかしくなってきた。これからの人生をどう生きるべきかを、もう一度考え直してみようと思った。

「もとより力などない自分だが、これまでお世話になった先輩や友人たちの万分之一でもお役に立てるなら、喜んでお受けしよう」。ふじおの腹は決まった。



第7章 「最強の応援団」

「お受けすることにした」と妻に話すふじおの表情は晴れやかであった。ずっと苦楽を共にしてきた妻とは以心伝心、その一言で十分伝わるはずだった。敦子の気持ちは、複雑であった。夫と知り合い、結婚。二人の最愛の子どもを出産、つらいことも苦しいことも乗り越えてきた。ただ、それもこれも、夫を信じ、愛情を感じていたからこそであり、その範囲を超えるものではなかった。

しかし、夫が政治の世界へ入っていくとなると、話は全く違ってくる。敦子は悩んだ。夫にとって何がいいのか考え続けた。決心はつかなかった。

敦子は実家の福島県富岡町の父に電話した。父は意外にも「ふじおくんが決めたことなら一緒に頑張りなさい」と言った。考えてみると、実家、富岡町は『原発の町』であった。国のエネルギー政策に協力し、危険極まりないともいえる迷惑施設を受け入れた町。確かに経済的には豊かになった。ただ、この国の政治家や官僚たちはどこまで

信用できるのか、人の命や安全より国策を優先させ、結局、弱い者が泣き寝入りさせられるのではないかと。そうした空気を肌身で感じていた母。その言葉に込められた、無言の怒りと悲しみは敦子の心を打った。政治の問題は生活に直結している、政治が良くなるなら、生活も良くなる……。

誰人も無関心であってほしくない。周囲を見ても、息子の病氣、住まい環境など自分のような平凡な主婦が声を上げていかねばならない問題がいくつもある。それが政治なんだと気づいた。逃げるのは、よそう。「私も一緒に頑張るわ」。敦子の表情に迷いはなかった。



第8章 「みんなと、ともに」

昨年春、郷里・大分の父が倒れ、危篤状態となった。体中から管をつながれて集中治療室に横たわる父は口を動かし、何かを伝えようとしていた。酸素マスクの下から息絶え絶えに、しかし、凜とした声で「大丈夫! 絶対に治す。心配するな」との言葉が聞こえてきた。思わず父の手を力強く握り締めた。

「手は尽くしたが、原因が解らない。本人の自然治癒力にかけるしかないが、最悪の場合も覚悟しておいてほしい」と医師か



ら告げられたが、ふじおには不安はなかった。「大丈夫です、必ず治ります」。それから、母を先頭に家族全員の必死の応援で三ヶ月後、奇跡の回復を遂げ、退院した。その姿は、凱旋將軍のようであった。

25年前、ふじおの両親は、苦しい家計の中、やりくりして自分を大学へ進学させてくれた。親のありがたみもわからず、授業に出ないで遊び回っていた時期もあった。今思うと、本当に申しわけない。貧乏と病気の宿命を断ち切って40年、ひたすら人々のために、信じた道をどこまでも突き進む父。その父を支え、朝から晩まで働きながら育ててくれた母。阿佐谷での25年間もまた、常に人々の支えがあった。お金がなかった学生時代、ご飯をご馳走してくれた婦人の方、ふじおの身勝手なわがままで、厳しく叱りとばしてくれた先輩。共に泣き、共に笑った友人たち。本当にありがたいと思った。

ふじおは、両親はじめすべての友人、先輩、後輩に心から感謝し、新たな舞台で雄飛することを誓っていた。

—完—